

学校教育目標 創造的で活力ある人間の育成

評価項目	今年度の重点目標	具体的取り組み	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考	判定	根拠となる資料	成果と課題	対策
学び続ける生徒	(1) 学習意欲にあふれ、学び続ける態度を育成する。	努力ノート 家庭学習 週末課題	教務主任	教師の働きかけに応じて学ぼうとするが、自ら学ぼうとする意欲の低い生徒がいる。	学習課題の提出状況を把握する。	課題の提出率が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	C, Dの場合は再検討を行う。	学期ごとに状況をまとめる。	B	努力ノートの提出率は100%近くまで上がってきているが、週末課題等の提出率は80~100%と学年や教科によってばらつきがある。	学年によってばらつきはあるが、年度当初に比べて宿題や課題の提出率は上昇してきた。しかし、提出しない生徒が固定化してきている。	3月末まで、家庭学習の必要性等を説明しながら、継続的に個別指導をしていく。
	(2) 目標を持って学習したり、成果を上げようとする生徒を育てる。	漢字テスト スプリングコンテスト 計算力テスト 用語テスト 定期テスト	教務主任	目標は掲げるが、常に意識して努力しているとは言い難い生徒がいる。	各テストごとに設定した目標点を達成した生徒の割合を調べる。	各テストの目標を達成する生徒の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	C, Dの場合は再検討を行う。	各テストの結果から判断する。	B	定期テストの平均が338~360点、各種コンテストの合格率は55~100%。	定期テストの目標点を高くする生徒が多い。高い目標を高く設定することは、良いことであると考えられる。しかし、その目標実現への努力が不十分な生徒もいる。各種コンテストでは、特に市内統一漢字テストの合格率が高かった(86~100%)。	高すぎない目標を設定させ、段階的に達成させることで、確実な達成感を味わわせるべきであった。各種コンテストは、学級担任とも連携しながら、小テスト等をくり返すことで、合格率を上げていくことができる。
	(3) 校内研究を充実させ、生徒の学力の向上に努める。	さんか型授業	研究主任	「さんか型授業」を取り入れ、月2回以上の授業研究と、生徒の学力の向上に結びつく授業の研究に努めている。	教師が「さんか型授業」を意識的に行い研究授業を積極的に行う。	さんか型授業を月に A: 5回以上 B: 3回以上 C: 1回以上 D: 0回	C, Dの場合は再検討を行う。	教師アンケートと週案につけた印から判断する。	B	生徒アンケート(「かかわりあう」授業があった89%、「かく」授業があった95%)、週案、研究発表会紀要、研究授業	年間の計画通り、月2回以上の研究授業を行った。各種の学力調査の結果から、生徒の学力向上があったことが検証された。授業に関するアンケートも、1学期の結果より2学期の方が良好な結果となっている。ただ、さんか型授業実施に関する週案への記入には、ややばらつきがあった。	週案への記入(さんか型授業を5回以上実施する)については、全職員が達成しているとは確認できなかった。月ごとに確認していく必要があった。
	(4) 読書活動を活性化し、望ましい読書習慣の確立を図る。	いしかわ読書の日(23日)の取り組み(通信)読書カード委員会活動 論説文を読んで意見文を書く(金曜日)	国語科担当	朝の読書は真面目であるが、家での読書量は少ない。	読書カードから読書量や時間が見られる。	平均月に2冊以上の生徒が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	C, Dの場合は再検討を行う。	読書カードを活用する。	B	読書カードの記入内容、読書指導	読書カードの集計結果は、月平均2.1冊となっているので、読書活動は活発に行われたことがわかる。また、学年2回以上の読書指導の時間をとることもできた。	家庭へ向けた「いしかわ読書の日」の取り組みへの呼びかけが、1学期しか行うことができなかった。家庭へ向けた通信をもう少し多く出したい。
思いやりのある生徒	(5) 正しい言葉遣いや挨拶ができる生徒を育てる。	あいさつ運動 生徒会活動 ボランティア活動	特別支援教育担当	自ら進んで快くあいさつをする生徒は増えているが、全員ではない。	生徒は自ら進んであいさつをかわしている。	「自ら進んであいさつをしている」 A: よくあてはまる B: あてはまる C: あまりあてはまらない D: あてはまらない	A+Bが80%未満の場合は再検討を行う。	1・2学期に生徒アンケートを行う。	B	生徒アンケート(6月と12月実施)では「自ら進んであいさつをしている」のA/B評価が94%。	自ら進んであいさつをしている生徒がほとんどである。6月実施時は94%(Cが2名)だったが、6月時C評価だった生徒1名が12月時にB評価になった。しかし、6月時アンケートをしていない生徒が12月時にアンケートでC評価だったため、12月実施のA/B評価は94%(Cが2名)。あいさつや基本的な生活習慣を身につけさせるために、家庭でのあいさつの励行等の協力も必要と思われる。	あいさつの大切さを学活や道徳の授業などで考えたり、適時声かけしたりする。C評価の生徒は、コミュニケーションのとり方に問題がある場合も考えられるので、個別に声かけを行い、配慮する。
	(6) 生活目標を意識して生活することができる生徒を育てる。	道徳の授業 生徒会活動 生活目標 生活習慣調査	生徒指導主事	学校生活や家庭生活の向上を意識して生活できる生徒の割合を更に高める。	生活習慣調査を実施する	「生活の目標を意識して行動できた」と回答した生徒が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 60%以上	C, Dの場合は再検討を行う。	学期1回以上の調査によって変容をみる。	B	生活習慣アンケート(6月と12月に実施)	学校全体の月ごとの生活目標の他に、各学級では毎日の生活目標を設けて意識させている。アンケートでは目標を意識して行動していると回答した生徒の割合が81.8%であった。	
	(7) 行事やボランティア活動に積極的に参加する生徒を育てる。	道徳の授業 ボランティア活動 生徒会活動	生徒会担当	自ら進んでボランティア活動に参加しようとする意識が十分とはいえない。	ボランティア活動に積極的に参加している。	「ボランティア活動に積極的に参加していますか」 A: よくあてはまる B: あてはまる C: あまりあてはまらない D: あてはまらない	A+Bが80%未満の場合には再検討を行う。	生徒アンケートや観察、記述などから総合的に判断する。	B	生活意識調査アンケート「ボランティア活動に参加しようと思えますか」の肯定評価A/Bが90%。生活行動調査アンケート「ボランティア活動に積極的に参加していますか」の肯定的評価A/Bが81.8%。	4月から12月にかけては駅前ボランティアを行い、地域の美化に貢献することができた。また、花いっぱい運動として、花のプランターを育てて地域の施設に配布したり、あての木園訪問や各種募金活動に参加することも多々できた。どの活動も生徒のボランティア意識を高めるのに役立った。行動調査では積極的に参加した生徒は81.8%であったが、自己評価の高くない生徒も数名いた。	駅ボラや花いっぱい運動、あての森フェスティバル、あての木園訪問など行った感想を書いてお互いに読み合いをしてボランティア意識を高めた。今後も各教科や学活、道徳の時間などを通して、いろいろなボランティア活動の種類について知るなどして、将来個人としてもボランティア活動に参加できる生徒の育成をはかりたい。
たくましい生徒	(8) 自分の健康に留意しようとする生徒を育てる。	専門医受診の推進 ほけんだより 生徒会保健委員会で啓発	養護教諭	全校生徒の39%が視力B以下である。	受診率を調査	受診率が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	C, Dの場合は再検討を行う。	夏休み前に受診を促す。休み明けに調査をする。	B	学校保健統計からB以下の受診率86.4%。	春の視力検査後と夏休み前に、保護者に受診を勧めた。対象の生徒には、保健室で個別指導をした。全校集会で、生徒保健委員会による、「目を大切にしよう」という劇を行い、目を大切にすることを意識づけができた。C.Dの生徒は全員受診した。B以下の未受診者が残念だった。	未受診の生徒には個別指導していく。
	(9) 体力増進に努め、部活動に励む生徒を育てる。	部活動 個人の取り組み 体育の授業	部活顧問 体育担当	体力面での二極化傾向が顕著である。	体力の要素の持久力の向上に努める	新体力テストによる評価	体力判定C, D, Eの生徒の持久力の20%向上を目指す。	5月, 10月, 2月にシャトルランを測定する。	B	シャトルラン 5月記録 2月記録 1年男子 59.22 75.5 1年女子 50.43 63.43 2年男子 82.0 90.5 2年女子 57.5 62.2	5月には1・2年生は男女とも県平均を下回っていたが、2月には超えることができた。2倍以上の伸びを示す生徒もいた。体幹はまだまだ弱々しい生徒が多い。	3学期、1・2年生は部活で、3年生は体育の時間のサーキットトレーニングで鍛えたい。
	(10) ふるさとを愛する生徒を育成する。	総合的な学習の時間 あての森フェスティバル	生徒会担当	地域のことをよく知っているが答えられる生徒が少ない。	地域とのふれあいの機会を通じ、ふるさとに関心をもち好きになる。	自分の住んでいる地域が好きだと答えられる生徒が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	C, Dの場合は再検討を行う。	1・2学期に生徒アンケートを行う。	A	生活意識調査アンケート「三井町内の伝統行事などを大切にしようと思えますか」の肯定評価A/Bが100%。生活行動調査アンケート「輪島市内や三井町内の伝統行事などに積極的に参加していますか」の肯定的評価A/Bが90%。	学校が閉校するということもあり、総合学習では1年生が地域について、3年生は学校中心に三井地区について詳しく調べ、それを文化祭で発表することにより、全学年が地域について知識・理解を深めることができた。また、あての木園訪問やあての森フェスティバルでも地域の方と交流を深めることができ、地域とも結びつきが強まったと感じている。	
(11) 自分を客観的に見つめ、自立しようとする生徒を育てる。	自問清掃	清掃担当	自問清掃中に話をする生徒がいる。	自問清掃を通して自己を高めようとする。	自問清掃ができている生徒が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 70%未満	Cの場合は再検討を行う。	1・2学期に生徒アンケートを行う。	A	自問清掃最終アンケートを2月に実施	掃除の反省会時に5項目の確認をした。最終アンケートの結果、自問清掃がだいたいできていると回答した生徒の割合が97%であった。	掃除場所の担当教諭と一緒に掃除をする。静かに掃除の取り組みをさせる。話をする生徒には、反省会で個別指導をする。	

学校関係者評価	<ul style="list-style-type: none"> ・評価がBのところでも、Aとしてよいと思うところもある。全体的に先生方はよくやってくれたと考えている。 ・あと1か月しかないが、不十分だったところは、少しでもよくなるように最後まで指導して欲しい。 	学校関係者評価を受けての対策	・高校や新しい中学校でも力を発揮できるように、評価が低かったところは、3月末まで継続して指導していく。
---------	---	----------------	---